

いよいよSPACE×DRAMA2003が間近に迫ってきました。

今回は、前半3劇団の公演のご案内です。1年間にわたって準備を進めてきた、このSPACE×DRAMA。ぜひお越しください。

千年枕 「ギャル～閉じません～」 (かっこ・ぎゃる～とじません～)

■作・演出: 松木麻里子
■公演日時
7月14日(月) 20:00
15日(火) 19:30※
16日(水) 19:30
※終演後、アフタートークあり

■料 金
前売1800円/当日2000円
■チケット取扱
千年枕、應典院
■劇団連絡先
TEL/FAX 06-6744-5581

劇団鹿殺し image

■作: 丸尾丸一郎
■演出: 髭の子チョピン
■公演日時
7月29日(火) 19:30
30日(水) 15:00※、19:30
※終演後、アフタートークあり

■料 金
前売1800円/当日2000円
高校生以下は1000円
■チケット取扱
チケットぴあ、鹿殺し、應典院
■劇団連絡先
TEL 0798-63-1660

しかばんび ひとで

■作・演出: 大橋 学
■公演日時
8月5日(火) 19:00
6日(水) 15:00※、18:30
※終演後、アフタートークあり

■料 金
前売1500円/当日1800円
■チケット取扱
しかばんび、應典院
■劇団連絡先
TEL 090-3940-2099

【新入会員ご紹介】

(2003年6月20日まで)
前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○法人会員

【大阪府】

銭辰堂 大阪市中央区

○一般会員

【大阪府】

小澤 通 枚方市

○個人会員

【和歌山県】

沢田祐蔵 伊都郡

○学生会員

【奈良県】

杉岡秀紀 天理市

全公演共通パスでもっとSPACE×DRAMA体験!

7公演をすべて1回ずつ鑑賞できる、お得な「全公演共通パス」発売! 友人との共同使用も可能です。

【発売期間】

5月12日(月)～8月31日(日)

【料 金】

1枚5,000円(税込)

※限定50枚

詳しくは應典院まで

いのちと出会う会

いのちについて語り合う場として定着した「いのちと出会う会」。6月と7月の予定をお知らせします。

第30回 6月19日(木) 「小さくされた者の側に 神は立つ」

話題提供者

日本フランシスコ会神父 本田哲郎さん
不況で職を失い、路上で生活をせざるを得ない釜ヶ崎日雇い労働者の支援にかかり13年。本田神父は、神の愛はこのような「貧しく小さくされた人々」にこそ向けられていると説かれます。路上死年間200人以上と言われる野宿者の実情と、イエスが示した本物の福音の姿を語っていただきます。

第31回 7月17日(木) 「紙芝居 『中村久子の生涯』」

話題提供者

紙芝居師 杉浦貞さん
中村久さんは幼くして病で両手両足を切断、見世物小屋に売られ、過酷な運命を乗り越えた明治時代の女性です。国や個人からの支援を全て断り、子育て、家事すべてをこなし、最後には親鸞の信仰にたどりつかった、日本のヘレン・ケラーとして知られます。日本で唯一、現役の紙芝居師・杉浦さんが自らの新作を情熱込めて演じていただきます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会
参加費: 会員800円・一般1000円

サリュ VOL. 38

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2003年6月20日
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. **38**

サリュ

フランス語で救いの意



劇場と劇団の新しい関係づくりをめざし、内容を一新した「SPACE×DRAMA」。昨年秋の選考会から約9か月間の準備を経て、まもなく本番の幕が上がる。
劇場と劇団の可能性が交差する夏。ここが終点ではなく、次の交差点へ進むために、1回目のチャレンジの成果と課題を冷静に見つめたい。
そのために不可欠な鑑賞者の視点……一人でも多くの参加を願いつつ。

※写真: 「SPACE×DRAMA2003」記者発表
(2003. 5. 16)にて

2003. June

2003年度総会報告& 運営委員長からのメッセージ

應典院寺町倶楽部が発足して満6年、市民活動・芸術文化活動の基盤づくりをめざして活動を続け、着実に地歩を固めてきました。5月20日には2003年度の総会を開催、第6期の活動の成果と課題を検証し、さらに充実した活動を行うための指針を確認し合う貴重な機会となりました(出席14名、委任状91名)。

2002年度(第6期)をふり返って

第6期は、自立したNPOをめざした体制の強化と、倶楽部の理念の社会的アピールを目標としてスタートしました。具体的な目標として、(1)各主催事業の充実、(2)事務局機能の活性化、(3)運営委員会との連携の円滑化、(4)財政基盤の強化、(5)独自の収益事業の立案・実施を掲げました。目標達成に向け、各運営委員が具体的なタスクを担い、事務局と連携しながら事業の遂行にあたってきました。

成果としては、「寺子屋トーク」「いのちと出会う会」の収益性が向上したこと。「コモンズフェスタ」は、初めて大阪府と大阪市の後援をいただき、社会的にその意義が認められつつあると言えます。「SPACE×DR

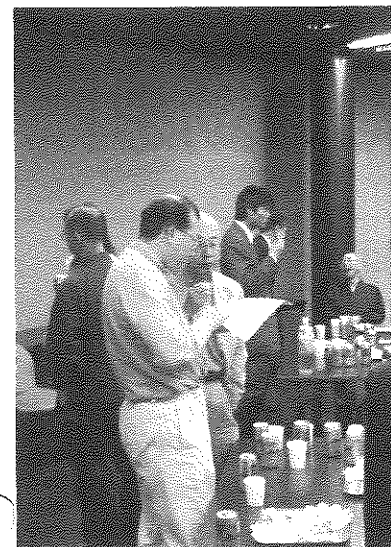
AMA」は新たなコンセプトのもとでスタートし、劇団との関係を築きながら着実に準備を重ねています。

事業を個別に見ると、「寺子屋トーク」は開催回数5回、参加者総数642名と相変わずの盛況ぶり。5回目を迎えた「コモンズフェスタ」は約2000名の参加がありました。恒例となったアーツ・プロジェクト、大学との協働、企業の協賛の他、初の試みとしてトークカフェを開催するなど、ますます多様で重層的な場を創り上げることができたとと言えます。「いのちと出会う会」も着実に回を重ね、繰り返し参加される方の中には寺町倶楽部に入会してくださる方もいます。



運営委員との連携の強化

今年度が始まってすぐに行われた交流事業「夜桜会」は、運営委員の三木さんの企画によってにぎやかに開催。バンドのラ



イブ演奏もあったためか、應典院を初めて訪れる方も多く、新しい出会いと交流の場になりました。

このように、それぞれの運営委員に具体的な役割を担っていただき、事務局との連携を強化し、より充実した事業運営を今後めざしていきます。新たに加わっていただく鳥居泰宏さん(2003年度のバドマ幼稚園PTA会長に就任)には、バドマ幼稚園と

の橋渡しをお願いする予定です。

2年間、運営委員として活動していただいた伊藤伸二さんは、残念ながら退任のお申し出があったため運営委員という立場ではなくなりますが、引き続き会員として、また

ご自身が代表を務める日本吃音臨床研究会のネットワークを活かしながら、寺町倶楽部をサポートしていただきます。

会員のみならず、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

7年目の寺町倶楽部にもぜひご協力を! 会員継続をお願いします!!

総会も無事終了し、7年目の寺町倶楽部がいよいよ本格的にスタートします。各事業の充実はもとより、収益性の向上をめざして、新たな展開を模索していきます。

NPOを支援するもうひとつのNPOとして、より多くの市民活動団体とのネットワークを広げ、またその活動を支援することを指向しますが、支援する寺町倶楽部があらゆる意味で自立した組織であることが大切になってきます。

倶楽部の収入は、そのほとんどが会費収入です。各事業ごとに収益性の向上をめざ

し、徐々にその成果は表れつつありますが、会費収入に頼らざるを得ないのが現状です。会員のみならずには、引き続きご支援をお願いするとともに、どうかお知り合いの方に、寺町倶楽部の会員勧誘のご協力をお願いいたします。

この時期、全会員の約7割の方が会費の更新時期にあたります。更新がまだの方には、更新月のお知らせと振り込み用紙を同封いたします。

改めて、ご協力をお願いするとともに、ぜひ事業へのご参加をお待ちしています。

★運営委員長・榛木恵子(NPO法人関西NGO協議会事務局長)さんに聞く

<第6期の総括と第7期の課題>

第6期をふり返って思うことは、まず、一つひとつの事業の特色がはつきりしてきたことでしょう。たとえば、今回からリニューアルされた「SPACE×DRAMA」はコンセプトが明確になり、劇団と協働しながら積極的に動き出していると感じています。「寺子屋トーク」は、昨年11月の第35回と今年4月の第36回が象徴するように、運営委員と事務局との連携が目に見える形で表れてきた、言い換えれば、それぞれの事業のシステムが整いつつあると言えるでしょう。

「コモンズフェスタ」も同様、5回という節目を終えて量から質への転換を図ろうとすることは、ある意味で事業の特色が明確になってきたからだだと思います。その事業を行う意味は何か、成果をどこに求めるのか、といったことをつねに考え、軌道修正していくことは組織の活性化に欠かせません。今後、寺町倶楽部と参加団体、参加者の三者にとって有益な事業となるよう、模索を続けていく必要があるでしょうね。

事業の充実とともに忘れてならないのは、会員さんとの距離で

す。入会者数と退会者数のバランスはどうか、会員向けの事業をどれだけ実施しているかなど、本格的に会員制度のことを見直すべき時期にきています。NGO(非政府組織)の活動と違って、事業の成果の見えにくい寺町倶楽部の活動ですが、だからこそよいに会員さんへのアカウントビリティ(説明責任)が求められるのです。また逆に、会員さんの声を聴く努力を惜しまず、双方向のコミュニケーションが生まれるような試みをしていくべきですね。たとえば、寺子屋トークのテーマやゲストの希望をたずねるアンケートを行うなど、事務局で一度検討してほしいです。運営委員会でも、会員制度のことを考えるタスク・チームを立ち上げるなど、じっくりと時間をかけて議論していくことが必要なのかも知れません。

新たに倶楽部へ入会したり、継続の手続きをしてくださるのは、寺町倶楽部に所属することによって生まれる参加意識や、事業への参加によって得られる学びなど、自分なりに何らかの意味を見出してくれているからでしょう。その期待を裏切らないような活動を、今後も精一杯続けていきたいですね。

■役員人事(敬称略)

・会長	扇谷 順介(賛助会員)	名畑 孝(一般会員)
・運営委員長	榛木 恵子(一般会員)	西島 宏(一般会員)
・運営委員	石黒 良彦(一般会員)	三木 康彰(一般会員)
	沖中 浩志(一般会員)	森栗 茂一(一般会員)
	関浦 照隆(一般会員)	・事務局長 秋田 光彦(賛助会員・應典院主幹)
	蔦田 夏(一般会員)	・参 与 秋田 光茂(應典院住職)
	鳥居 泰宏(一般会員)	・監 査 志野 義治(一般会員)
	中村 幸彦(一般会員)	

深化し、進化するNPOへ…… 公益性と収益性の調和のとれた活動を！

～第7期活動計画・事業～

活動方針

2003年度事業の基本方針としては、事業の充実化による社会的認知の拡大、それに伴っての新規会員獲得、また収益事業等、新規事業の具体的な実施と財政基盤の安定化を目標とします。

また、自立したNPOへ向け、収益性と公益性の調和のとれた活動の展開を指向し、事業を展開します。

活動計画

(1) 各主催事業の充実

従来事業の深化はもとより、他団体やボランティアとの協力関係を深め、人的交流を目的とした、市民文化発信のネットワーク作りを心がけ、点から面への展開をめざします。

(2) 事務局機能の活性化

会員、今までの事業に参画してくれた運営ボランティアを中心に、寺町倶楽部の運営スタッフとして、具体的に事業の一翼を担ってもらえる人材の確保をめざします。

(3) 運営委員(会)との連携の円滑化

事務局と運営委員(会)が連携を計り、充実した事業の展開を行います。また、事業の深化と拡大に向けて、新たな運営委員候補の確保をめざします。

(4) 財政基盤の強化

新会員の獲得に向けた活動はもとより、会員制度の見直し、また団体や事業に対する助成金を得られるように働きかけます。

(5) 独自の収益事業の立案・実施

倶楽部の理念に沿った収益事業(例としてコミュニティビジネスなど)、独自の事業の立案と実施をめざします。

事業計画

(1) セミナー事業

① 寺子屋トーク

・第36回 2003年4月29日

「女と男のより良い未来～ひとりの自立、ふたりの自立」

ゲスト：元国連女性開発基金(UNFEM)職員・三輪敦子さん

・第37回 2003年5月26日

『大阪』リバイバルと人材育成～価値創造の都市再生を考える』

ゲスト：東京大学大学院教授・汐見稔幸さん

大阪市大社会人大学院教授・佐々木雅幸さん

コーディネーター

大阪ガスエネルギー文化研究所客員研究員・弘本由香里さん

・第38回 2002年11月上旬

「タイトル未」 ※予定

ゲスト：アトリエインカーブ代表・今中博之さん

シアタープランニングネットワーク代表・中山夏織さん

他

※上記他、1～2回を開催予定。

(2) ネットワーク事業

① コモンズフェスタ

○期 間：2003年11月7日～9日

コモンズフェスタ2003では、過去の実績を鑑み、日程を短縮、「Art Commons～芸術で「ちがひ」をつなぐ」をテーマに、アーツに的を絞り開催します。アーティスト、市民、劇場を結びなおし、これまでにない出会いのコラボレーション(協働)を試みます。また、上町台地のアーツをテーマにした他の企画とリンク、点から面への展開を図ります。

② SPACE×DRAMA2003

○期 間：2003年7月下旬～9月上旬

「劇場と劇団は、場所を“貸す・借りる”だけの関係を越えることによって、新しい創造環境を創り出せるはずだ」との思いから、今回から舞台芸術祭のスタイルを一新。旗揚げ5年以内の劇団を対象に参加劇団を公募、選考から公演までの足かけ2年に渡り、参加劇団と共に作り上げる演劇祭です。彼らと共に育ちあうことももちろん、劇場以外のカラーを持っている應典院という「場の特性」を活かし、演劇ファン以外の人々とのコミュニケーションを図りながら、「劇場

の存在意義」や「演劇の公共性」を問い直します。また、今夏の公演の後に1劇団を選出し、應典院寺町倶楽部・シアトリカル應典院・劇団との「三者協働プロデュース公演」を2004年夏に実施します。劇場と劇団の関係を深化させつつ、また翌年度に参加する新たな劇団とも協働し、生み出した成果を受け継ぎながら、より充実した事業へと進化させていきます。

③ いのちと出会う会

・第28回 2003年4月17日

話題提供者：神戸ひまわり遺族の会 中村寿子さん

・第29回 2003年5月15日

話題提供者：関西学院高等部教諭 古田晴彦さん

・第30回 2003年6月19日

話題提供者：日本フランススコ会神父 本田哲郎さん

・第31回 2003年7月17日

話題提供者：紙芝居師 杉浦貞さん

※以後の毎月第3木曜日に開催(8月、12月は休み)

(3) サポート事業

・市民活動サポート事業については要検討

(4) 交流事業

会員同士、また誰もが自由に関われる場を、交流会として年3回開

催します。

・夜桜会 2003年4月4日

・お盆のつどい 2003年8月7日

・年忘れ交流会 2003年12月26日

(5) 出版広報事業

・偶数月にサリュを刊行

・その他広報活動

(6) 会議

① 会員総会

5月下旬に開催します。

② 運営委員会

年に3～4回開催します。但し、事業毎に運営委員が随時事務局の会議に参画します。

(7) 協力事業

その他、外部団体と提携して行う協力事業があります。広報面等での協力を行います。

(8) その他

・應典院インターネットに情報提供の協力

・應典院年報の配布協力

会員さんからのメッセージ



中塚 一さん(個人会員)

應典院のことは、ずいぶん前から知人に聞いて知っていましたが、なかなか参加する機会がありませんでした。

昨年9月、まちづくりをテーマにした寺子屋トークが開催されると聞いて、ようやく参加できたんです。第34回寺子屋トーク(東京

vs大阪・都心暮らしの愉悅)で、終了後のワンコイン交流会にも参加し、さまざまな分野の方々が思い思いのスタイルで集まっていることがわかり、正直感動しました。「應典院コモンズ」と言えるような場でした。トーク最初の演出(※)には、ちょっと驚きましたが(笑)。

私は、まちづくり(まち育て)をお手伝いさせていただくことを生業とするコンサルタントです。住民主体のまちづくりの牽引者として著名な、延藤安弘先生(千葉大学工学部教授、NPO法人・千葉まちづくりサポートセンター代表)の名言、「風の人と土の人が交じり合って地域の文化を豊かにする」を借りれば、私はコンサルタントとしては「風の人」。さまざまな地域に新しい

風を吹き込み、地域の方々がその地域のよさを再発見していくお手伝いという役割です。

でも、15年前から天王寺区に住み、家庭を築き、そろそろ“土の人”として地域の人々との関係をむすんでいきたいと考えていたところだったので、寺町倶楽部には“土の人”として参加し、多様な分野の“風の人”との交わりを期待して入会させていただきました。

入って約半年、多彩な事業を楽しみながらも、やや強風の吹き荒れている感もあり、それをまだ見きわめているという状態です(笑)。風の人と土の人、それぞれが関わるバランスを上手にとっていくことができれば、まさにそこから新しい“風土”が生まれるのではないのでしょうか。

個人的には、地域の子どもたちがアートに触れることのできるプログラムを提供していただけるとありがたいですね。私にも子どもがいますが、なかなかそういった機会がないので、文化・芸術を目的に掲げている寺町倶楽部に期待しています。私自身も、機会を見つけて企画運営に参加できればと思っていますので、よろしくお願いします。

※毎回、寺子屋トークのオープニングでは、ご本尊に照明をあて、音楽を流し、心を落ち着かせる時間をとっている。

第36回寺子屋トーク報告

第36回寺子屋トーク「女と男のより良い未来～ひとりの自立、ふたりの自立」が4月29日に開催されました(ゲスト:三輪敦子さん・元国連女性開発基金職員、共催:アーユス関西仏教国際協力ネットワーク)。ジェンダーをテーマに取り上げたことも、ワークショップをプログラムに組み込んだことも初めての試みです。当日は、会員の松浦善満さん(和歌山大学教授)のご協力により、樟蔭女子大学の学生がフィールドワークの一環として多数参加、祝日でありながら93名の参加者で大いに盛り上がりました。当日の講演とワークショップの内容についてご紹介します。

男は理系、女は文系?

第1部の三輪さんの講演は、まず、女と男のより良い関係を考える上で重要な「ステレオタイプ」についての説明から始まりました。ステレオタイプとは、社会の中で広く受け入れられている固定的・画一的な観念のこと。「イタリア人は陽気」というように、国籍・民族・人種・地域などを語るときに用いられませんが、もっとも気づきにくいのが男女間のステレオタイプです。たとえば、「男は理系、女は文系」というような極端な考え方で、一人ひとりの可能性を狭め、多様な現実の姿を見えにくくしています。

この男女間のステレオタイプは、ジェンダー(文化・習慣・宗教・経済状況などによって形作られる性差)によって形成されるものがほとんどです。メディアや教育、家庭生活を通じて日常的に刷り込まれるため、意識しにくいことが特徴となっています。

次に、実際の男女の意識の違いについて、さまざまなデータをもとに指摘されました。例をあげると、男性が「女性の人権を尊重している」というほど、女性は尊重されていると感じていないこと。職業観について、「男は仕事、女は家庭」という考え方を男性の6割が肯定するのに対し、女性は4割しか肯定していません。女性は出産後も就労継続を望む一方、男性は結婚退職を望む割合が高く、また、職場で男性の約半数は女性を対等なパートナーとして認識する一方、女性は対等だと思われていないと感じているなど、意識の差は明らかです。

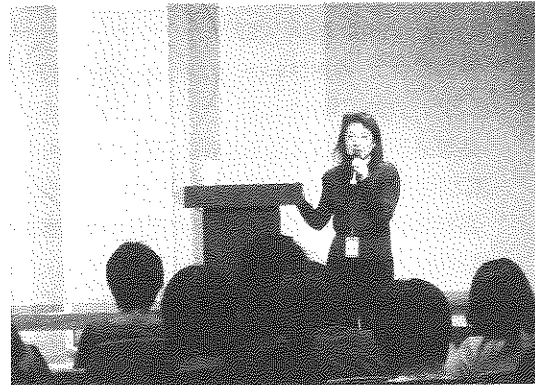
ところが、性別役割分担に疑問を感じて

はいても、男の子と女の子の育て方に大きな差が存続しています。1991年の大阪市の調査によれば、母親も父親も、女の子には思いやりと愛嬌があることを、男の子には活発でたくましく頼りがいのある子になることを求め、男の子には高学歴を期待するのに対し、女の子には望んでいません。こうして私たちは育てられたのだというところを、データは示しているようです。

安心・自信・自由を!

三輪さんのお話の後に休憩をはさみ、自分の周りや日常を見直すきっかけにしてみようために、ワークショップ「ちがいのちがい」を行いました。家庭・職場・地域の中で、どこにでもありそうな状況や行動を描写した22通りの文章を読み、自分にとって「納得できる違い」かどうかということ、15グループに分かれて意見交換、どのグループも1時間20分の時間では足りないほど活発な話し合いが行われていました。

最後は全員が集まり、各グループで話し合った内容の報告です。ある女性は22個の中から、「定年退職後、夫の75%は妻と一緒に旅行したいと考えている。妻の75%は、夫と一緒に旅行したくない」という文章を取り上げ、「妻が定年になるまで辛抱して、夫は自由にしていく結果ではないか」と分析しました。もう一人の大学生(女性)は、「元旦は夫(父親)の実家に新年の挨拶に行き、2日か3日に妻(母親)の実家に新年の挨拶に行く」ことが現在でも当然のように行われていることに驚き、「こんなことで



は結婚できない……」と率直な感想を述べていました。ジェンダーに関する意識は時代によって変化し、区別の度合いも人によって違うことが、この学生の発言によって浮き彫りになりました。ワークショップの体験のように、相手に自分の思いを話せる、聴ける、対話ができること、役割分担も話し合って合意の上で決めていくことがより良い関係をつくる上では重要です。

まとめとして三輪さんは、より良い関係づくりに重要な3つのキーワードとして「安心・自信・自由」をあげました。不安や恐怖がなく、一緒にいてほっとするというのが「安心」。自分が自分であることを認められている、励まされている状態が「自信」。自ら選べる選択肢のあるのが「自由」。これまで刷り込まれたジェンダーの影響で、自分にも思い込みがあること、相手には違う考えもあることを認識し、違った考え方を話し合いながら、互いの着地点を見い出せるのがより良い関係だと話されました。

一人ひとりの個性に合わせた選択肢を与えることは大切です。「安心・自信・自由」をキーワードにして、不安や恐怖を感じない、肯定されている感情を抱かせてくれる、選び取れる自由があれば、女性と男性の、またあらゆる人々の関係により良い未来が訪れるのではないのでしょうか。

友人の今中博之さんたちの、新しいアートセンター「アトリエ・インカープ」が平野区に完成、先日オープニングのお祝いに行ってきました。今中さんは、自身は一流のデザイナーとして活躍する一方、長年無認可の作業所の活動を続けてきましたが、今回は社会福祉法人となって、装いも新たに再出発となりました。

このアトリエのすばらしさは一言で説明しつくせないのですが、ひとつだけ挙げるとしたら、最初からプロのアーティストと障害者が一緒にコラボレーションできるような創意が凝らしてあること。アートというひとつの場に、障害者と芸術家、その家族、学生さんや地域の人たちがいていねいに関われるよう作られていて、とかく囲い込みがちだった「施設」のイメージがすっかり変わっているのです。今中さんはここで、障害者アート運動ではなく、本物のアウトサイダーズ・アートを開拓しようと意気込んでいます。

「表現をつくる」という地平においては、障害のあるなしは関係のないこと。アートが私たちの常識や固定観念を取り払い、一人ひとりの感性や表現を引き出してくれます。人間同士の存在をふりむけた、創造と協働がどんな場や関係を生むのか、これからが楽しみでなりません。

■善光寺ご開帳に団参



「牛にひかれて善光寺詣」で有名な信州・善光寺が7年ぶりにご開帳、去る5月12日、大蓮寺・應典院合同の参詣団がお参り

しました。東京ディズニーランドより賑わったと言われる山内は、庶民の信仰にあふれており、京都や奈良にはない魅力を満喫しました。善光寺大本願は、浄土宗の大本山でもあり、代々の尼公上人である鷹司誓玉台下にも拝謁の栄を賜りました。

一行33名は11日に大阪を出発、おなじみの松本市・神宮寺を訪問、大町温泉で懇親の一夜を持ちました。

■NHKで生前個人墓「自然」紹介

去る4月8日、NHKのニュースワイド番組「かんさいニュース一番」で、大蓮寺の生前

上町台地からまちを考える会発表会

もうひとつの都心＝上町台地の魅力をアピールしようと、まちづくりNPO「上町台地からまちを考える会」が発表会、去る5月31日、生国魂神社を会場に、発表会が盛大に開催されました。

大阪文化の発祥地・上町台地は、都心居住の生活区としても知られていますが、さらに魅力あるコミュニティとして、地域資源や市民力を開発・育成しようというのが、この会のねらい。既存の拠点や活動者をネットワークし、また行政や企業や大学とも積極的に協働していこうという趣旨でもあります。京都大学の高田光雄教授をはじめ、地域・NPO、大学、企業から集まった理事の面々もユニークかつ実力派ぞろい。当面は私が代表理事を務めることになりました。会の活動は秋から本格化、上町台地をテーマに「まちの学校」「アート・ツーリズム」「アート・マンスリー」などが予定されており、上町台地はアート一色となりそうです。



秋田住職発 應典院 掲示板

個人墓「自然」とエンディングサポートの活動が紹介されました。

当日は衛星通信を使った生中継ということで、わずか7分程度の放映のために半日を費やす周到ぶり。放送は、前半は境内墓地から、後半は應典院本堂から堂々の中継となりました。

放送直後から「自然」の問い合わせや見学が相次いでおり、反響の大きさに驚いています。

■大阪市立大学大学院で 創造都市の講義

去る4月18日、今春開学した大阪市立大学の社会人大学院創造都市研究科で、ワークショップ演習を担当させていただきました。全国初の社会人のみを対象とした同大学院には、行政やNPO、マスコミやベンチャーなどから優秀な人材が参加、当日も熱のこもった講義となりました。應典院のこれまでの取り組みと、劇場の役割、まちづくりへの展望など2時間にわたってお話しました。院生の中には私の知人も多く、今後は大学とお寺の「民学協働」も考えられそうです。

■夏の風物詩、万灯会

昨年、詩の学校の一環として開催した「万灯会」を、今年は應典院も協力、夏の風物詩として定着をめざします。

万灯会とはお盆の行事で、墓地一帯にお明かりを灯し、ご先祖さまの御霊をお迎えするもの。大蓮寺檀信徒の有志の協力も得て、300個ほどのお明かりを墓地一帯に配置します。夏の夜、幽玄な光景にしばし時を忘れてみませんか。

8月1日19時開会の予定。参詣無料。